はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
VOL. 06
発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市大字双柳1-1　Tel (042) 973-2111
第6号　平成23年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

飯能の石仏と土蔵・店蔵建築を学ぼう

●第６号の特集は「飯能の石仏と土蔵・店蔵」

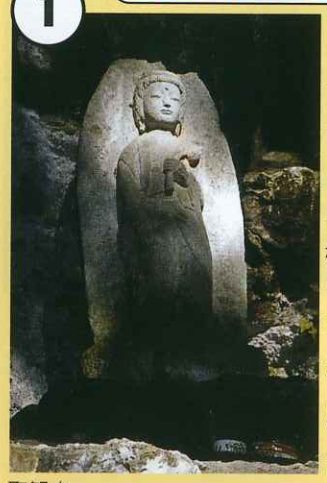
今回は石仏と土蔵・店蔵建築を取りあげました。市内には多くの石仏があります。３回シリーズで飯能の石仏を紹介しておりますが、今回が第３回目となります。また、まちなかには古い建物が残されていますが、今回はこの中から土蔵・店蔵建築をご紹介いたします。

1 特集「飯能の石仏」第3回

日本石仏協会会長
飯能市文化財保護審議委員会委員長
坂口　和子

はじめに　特集「飯能の石仏」の第１回では〝石仏ってなに？〟にお答えする形で説明をいたしました。〝どこにあるのか・いつ造られたのか・何のために造ったのか・その種類は・一体の石仏から何がわかるのか〟というものでした。第２回は石仏の種類とお像の姿そしてその信仰についてお話しました。全国的にみて種類としていちばん多いのはお地蔵さま、次が観音さま、３番目が庚申さまですが、飯能も同じようにこの三つが分布しています。第３回は飯能市域でぜひ見ていただきたい石仏をご紹介いたします。

1 聖観音（下名栗・尾須沢鍾乳洞）


聖観音

木漏れ日をうけて静かにたたずんでいるお姿はやさしい女性のような観音さまです。こうもり岩と呼ばれた岩山にだれがおまつりしたのでしょう。寛文７年（1667）に造られたので、すでに344年も経っています。市内でいちばん古い石仏です。同じ年号の虚空蔵菩薩が高山南久保に１体あります。飯能市域の石仏造立は寛文のときから始まりました。

2 閻魔と奪衣婆（赤沢・勝林寺跡）

えんなさまを知っていますか？　嘘をつくとえんまさまに舌を抜かれるといわれて昔のこどもには恐ろしいものの一つでした。これは中国式の服装をした地獄の裁判官です。死んでから地獄に落ちないように、という信仰のあらわれです。右の老婆はだつえばといって三途の川（地獄の渡し場）を渡ってくる亡者の着物をはぎとる役目です。どちらも風化してかわいいお顔になりました。文政12年（1829）の造立です。

閻魔　　奪衣婆

③ 弁才天と十六童子（上直竹上分・弁天橋傍）

弁天橋という小さな橋のそばで静かに小川のせせらぎを聞いている弁天さまです。頭上に鳥居をのせお顔は残念ながら潰れていますが端整なたたずまいです。坐像の下は弁天さまの従者である十六童子がかわいらしく彫られています。弁天さまは福徳・芸能・学業成就の信仰があり、このお像も女性の造立です。

弁才天と十六童子

④ 倶利伽羅不動（上直竹上分・富士浅間神社）

天然記念物タブの木のある浅間神社境内奥に滝があります。その滝壺を背にして変わった石像が立っています。これは不動明王の別のお姿で、宝剣を龍が呑みこむ形に造られています。くりから不動と呼ばれ昔は雨乞いを祈願したといいます。

倶利伽羅不動

⑤ 勝軍地蔵＝愛宕さま（小岩井・無量寺裏山）

姿・形の変わったお地蔵さまです。お地蔵さまは丸い頭がきまりなのですが、これは冑をかぶり鎧を着て馬にまたがっているお姿です。あたごさまと呼ばれ、〝火伏せ（山火事など）〟をお願いしました。

勝軍地蔵

かわいらしいお人形さんのようなお像ですが彫りは精巧です。隣の一体は足が折れています。勝軍地蔵と秋葉権現が並んでいる一対が原市場の房ヶ谷戸にあり、やはり火伏せの仏さまです。

⑥ 見返り地蔵（白子・長念寺）

長念寺の墓地に見返り地蔵と呼ばれるお地蔵さまがあります。足元にひとりの童子、錫杖には幼児がとりつき、お地蔵さまはやさしいまなざしで振りかえっています。死後の世界でも衆生を救ってくださるというお地蔵さま、とくにこどもたちをいつくしむお姿です。

見返り地蔵

⑦ 十六羅漢（飯能・天覧山）

名刹武陽山能仁寺の裏山天覧山の山腹に十六体の羅漢さんが安置されています。羅漢さんは修業者の最高位にあるお釈迦さまのお弟子さんです。お姿の精巧な彫りは見応えがあります。背中に飯能の寄進者の名が刻まれており江戸末期に奉納されたことがわかります。

十六羅漢

以上簡単にご紹介しましたが、飯能全域には沢山の石仏がのこされています。ご先祖が心をこめて造り祈った石仏を未来に向けて大事にしていきたいと願っています。

特集「飯能の石仏と土蔵・店蔵建築」

飯能市に残る土蔵・店蔵建築

飯能市教育委員会生涯学習課
主査
熊澤　孝之

1 **はじめに** まちなかには様々な古建築が残されていますが、今回は、土蔵と店蔵を取り上げ、ご紹介いたします。

店蔵建築とは、蔵の火に強い構造と、店舗建築の構造が合体してできた建築様式で、飯能では明治30年代から徐々に建てられるようになっていきます。

現在市内には４軒の店蔵建築が残されています。

2 **中清** 店蔵と袖蔵がセットで残っている数少ない建物です。

現在の店舗の裏に明治期の店蔵が残されており、わずかに屋根の一部を見ることができます。当時店蔵の前には広い空間が用意され、商品の積み下ろしの荷車を停めたり、市の際に店を出す場所に使用されていました。

脇の袖蔵は、江戸期の建築と伝わっていますが、詳細な年代はわかっていません。しかし蔵内部の柱には、「武州一揆」の時の刀傷が明瞭に残っており、歴史の生き証人としてその時代を現代に伝えてくれています。

（本町：中清商店）

3 **銀河堂** 店蔵とそれに続く建物の配置がよくわかる建物群です。

店蔵は下屋部分が改築され現在喫茶店として利用されている明治期の建物です。

通りに面して栄えた所では、間口に対して奥行きの長い敷地が一般的で、西側の駐車場から見るとよくわかりますが、通りに対して縦に建物が並びます。店舗の奥に居住空間の主屋（居宅や蔵前と呼ぶ）が続き、その奥には商品を入れておく中蔵が並びます。その奥には中庭が

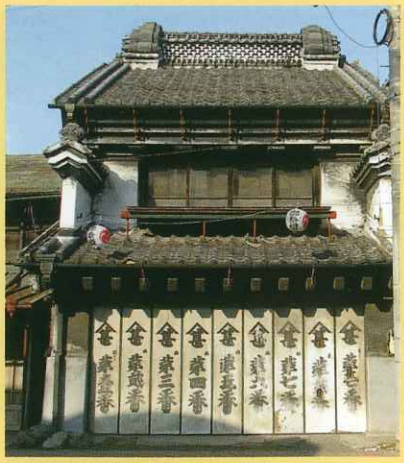
（本町：銀河堂）

配され、日光を取り入れ、風通しをよくする役目をもっていました。中庭付近に勝手場や風呂、便所が作られます。その奥は離れとなっていますが、ここに土蔵が作られることもありました。

4 **店蔵絹甚（市指定文化財）** 絹甚は篠原甚蔵・長三親子によって明治37年に建築されました。明治期は、絹の買い継ぎ商（生糸や絹織物を買付け、税を納めて問屋に売る仲買の一種）を営んでおり、その商売で蓄えた財を元に、この建物が建築されました。

絹甚は間口３間と小振りですが、木材や装飾は贅の限りを尽くしています。まず、１階の屋根（下屋）の上には「うだつ」があがっています。うだつは、「うだつが上がらない」の語源になったもので、隣家の火災から２階の窓を守る防火壁です。市内の建物ではこの絹甚だけに認められます。次に外壁は、最高級の黒漆喰仕上げです（１・２階居宅側の外壁は当時のままです）。通常の漆喰（白）で仕上げた後、半乾きの状態で黒漆喰を重ね、職人の手で磨き上げて仕上げます。最も手間のかかる仕上げ方法です。また、軒先の瓦には、「へに甚」の文字が陽刻され、うだつの瓦には「きぬや」の文字がみられます。入間市小谷田にあった「瀧澤」という瓦店に特別に依頼して焼かせた瓦を用いています。

最後に屋根の棟には、高く瓦が積んであります。両側には非常に大きな影盛が見られます。棟を大きくすることで建物全体を大きく見せているのです。棟の飾りは「青海波」と呼ばれる模様で、瓦を４段積んで波を表現して


板戸で閉められている状態・修理前

修理後

（本町：店蔵絹甚）

います。あらゆる装飾が施された建物と言うことができます。棟飾りは瓦と漆喰だけで表現された模様で、瓦職人と左官職人の合作といえるのかもしれません。

次に建物の構造を紹介します。正面に見える漆喰塗りの戸は、「板戸（いたど）」と呼ばれる、防火設備です。西ヨリ第一番、第二番…と書かれていますが、これは、戸を閉める順番が書かれています。この板戸は普段閉めることはありません。近隣で火災が発生した時にだけ使用します。現在の防火シャッターの役割をしています。

5 入口電業（いりぐちでんぎょう）

写真中央の土蔵造りの建物が店蔵です。現在は店蔵の下屋部分を取り壊し、新しく店舗がつくられています。しかし、店蔵の下屋以外は大切に残されており、現在も事務所として使用されています。店蔵の妻壁には、下見板（したみいた）が取り付けられています。漆喰壁は風雨に弱いため、正面から見えない側面（妻側）の壁には、このように板を取り付けて漆喰を保護していました。

入口電業は屋号を「入口（いりぐち）」といいます。この屋号は、「縄市（なわいち）」の入口にあたる家であったために付けられたものです。反対に広小路（ひろこうじ）の先にある新井家は屋号を「出口（でぐち）」といい、この2軒の間が当初、「縄市」の開かれていた範囲であったと、屋号が教えてくれています。

（本町：入口電業）

6 石黒家の蔵（旧 そば工房・時）（いしぐろけ くら こうぼう とき）

個人所有の土蔵として大切にされてきた建物です。飯能には、数多くの土蔵が残されていますが、こちらの土蔵のように屋根が土蔵本体に組み込まれているものと、本体は瓦を乗せない切り妻の屋根を造り、その上に木で造った屋根を置いた『置き屋根』（絹甚の土蔵はこのタイプです）の両方が存在します。2階の開口部は、こちらのような『観音扉（かんのんとびら）』タイプと、片方へ引く戸がつく『引き戸』タイプが見られます。土蔵は外壁を漆喰で仕上げていますが、風雨に弱い漆喰を保護する目的でその上から下見板を写真のように取り付けることが多かったようです。

現在この建物は内部が改修されており、以前はそば屋を営業していました。

（八幡町：石黒家の蔵）